京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

被害者にも加害者にも寄り添える社会

精華町立精華西中学校　一年　野村（のむら）　怜花（れいか）

私の、いじめに対する考えを変えた言葉がある。

「どうしていじめられてる方が逃げなきゃならないんでしょう。欧米の一部ではいじめてる方を病んでると判断するそうです。いじめなきゃいられないほど病んでる。だから隔離してカウンセリングを受けさせて癒すべきだと考える。」

これは、あるドラマの主人公がいじめに関して語ったときの言葉である。

でも、いじめの加害者がなぜ病んでいるんだろう。加害者が悪いことに変わりはないし、病んでいたとしてもなぜいじめにつながるのか初めはわからなかった。考えた結果、もちろん、遊びがエスカレートしていることもあるだろうが、加害者が実は病んでいて、ストレスを発散しようとすることがいじめになってしまうというケースもあると思った。その場合、加害者は別の誰かにストレスを与えられた被害者なのかもしれない。

私は以前、いじめの加害者が全て悪く、被害者がカウンセリングの治療を受けて立ち直るべきだと思っていた。しかし、この言葉により、加害者は実は問題等を抱えていて、被害者はもちろん、加害者にも社会は寄り添っていかなければならないのかもしれないと思うようになった。

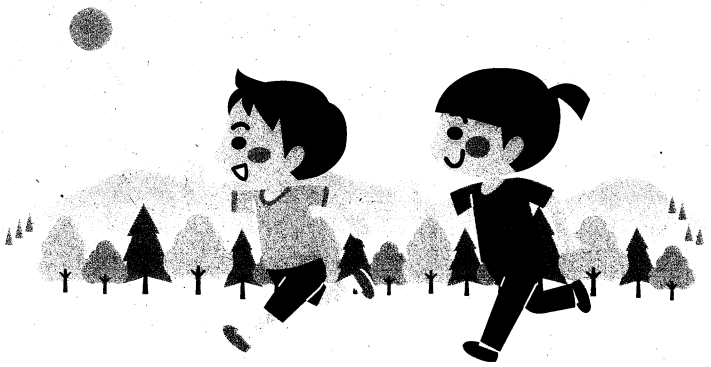
ただ、犯罪やいじめがあった時、今の社会は以前の私の考えと同じような対応になっているように思う。犯罪やいじめの被害者の方に寄り添っている方が明らかに多く、根本的な解決にいたっていない。私も、被害者への支援が最優先だと思うが、加害者へのケアがもっと必要だとも思う。加害者が社会に見放されたままだと、加害に至った経緯が明らかにならず、「このような事件が起きた」という事実だけが報道されてしまう。それをなくすためには、もちろん加害者に適切な処罰を下したうえで、誰かが加害者の話を聞き、その人のことを考え、ケアすることが必要だと思う。

社会におけるいじめと犯罪への対応の仕方の違いについても考えた。私は、社会はいじめより犯罪の方を重視していると感じる。確かに、いじめに比べると、犯罪は人々の生命や生活を直接脅かすものが多い。そのため、加害者が裁かれたり、刑務所に入れられたりする法律が作られている。さらに、犯罪者は刑務所で更正したのち、保護司に再び罪を犯さないよう、立ち直りを支えてもらえるような制度まである。一方、いじめの加害者はカウンセリングなどに相談できるが、あまり活用できていないように思う。しかし、いじめも、被害者の当然あるべき日常を脅かすという点で、「犯罪」であるとも言える。そんないじめを軽視してもいいのだろうか。いじめの加害者が社会から放置され、間違った道を進み続ければ、大人になって犯罪という形でまた被害者をつくり、人生を狂わせてしまう。社会はもっといじめの加害者の治療を考えるべきだ。

外国では「犯罪学」という学問が大学で学べるそうだ。犯罪学とは、犯罪をなぜ起こしてしまうのか、犯罪に至るまでの経緯などの法則性を発見し学ぶ学問だそうだ。日本にも数は少ないが犯罪学を学べる大学がある。犯罪の原因や経緯を知れば、加害者の抱えた思いが見えてくる。犯罪学を学べば、少しは加害者の思いが私たちにも分かるかもしれない。その法則が絶対というわけではないが、パターンを知ることで、少なからず加害者の心情を考える人が増えると思う。それは犯罪の裏側を考えるということだ。表側だけでは、加害者がどんな事件を起こし、被害者がどうなってしまったかぐらいしかわからない。しかし、加害者に秘められた感情や悩み、被害者と

加害者の関係など、犯罪にはたくさんの裏側が存在し、それを知らない限り加害者がすべて悪いと決めつけてはだめだと思うのだ。

私はこれから、いじめや犯罪の裏側を考え、犯罪の真相を知る第一歩を踏み出したい。犯罪者に対する態度や考えを多くの人が変え、その考えをもとに対応をしていけば、社会はより良くなっていくと思う。

最近の犯罪の再犯率は、起こった犯罪の半分ほどにもなっている。いじめという罪が犯罪に発展する前に青少年を良い道に導き、犯罪者への対応や支援を社会が考えていくことで、犯罪の発生率も再犯率も減少するだろう。

日本は現状、いじめの被害者にはケアすることと逃げさせることをうながし、加害者には罪を与えることだけをしているように思う。この現状を変え、犯罪やいじめを減らすためには、被害者だけでなく加害者にも寄り添うという考えを社会がもち、対策を講じることが大切だと思う。そうすることで、被害者も加害者も、そうでない人々も良い道に前進できる、明るい社会になると私は考える。